

19世紀のロシアバレエの発展における独立したディヴェルティスマン公演の影響

大林貴子（早稲田大学大学院文学研究科）

【背景と目的】

一般にディヴェルティスマンは、全幕バレエにおいて物語との関連の薄い、独立した舞踊的な部分を指し、19世紀ロシアバレエにおいてはこのディヴェルティスマンの発展が顕著である。例えば『コッペリア』や『眠れる森の美女』の最終幕は、クラシック舞踊やキャラクターダンスで構成された大規模なディヴェルティスマンである。

しかし、上記のようなディヴェルティスマンとは異なる「独立したディヴェルティスマン公演」が19世紀のサンクトペテルブルク帝室劇場で上演されていたことは、ほとんど知られていない。発表者はこれまでの研究で、独立したディヴェルティスマン公演は①独立した一つの公演ジャンルとして確立されており、演劇やオペラ、バレエの後に上演されていたこと、②1830年代にレパートリーに定着したこと、③振付者が不明なものがほとんどだが、デイドロやO.ポアロ、ペロー、サン＝レオン、プティパらが振付けたものが存在したこと、④19世紀中葉以降はダンスや詩の朗読、歌などの構成からダンスのみの構成に変化したこと、⑤ダンスの内容はパ・ド・ドゥやパ・ド・トロワのほか、各国のキャラクターダンスで構成されていたこと、⑥上演数がかかなり多かったこと、⑦プティパの第一バレエマスター就任後は、ほとんど上演されなくなったことなどを明らかにしてきた。

この研究を通して、独立したディヴェルティスマン公演と全幕バレエ発展の間に相互関係が存在する可能性、独立したディヴェルティスマン公演を全幕バレエが受容した可能性を調査する必要性を認識した。

【研究資料・対象期間】

帝室劇場の公演情報ポスター（Афиши

Императорских театров、以下「ポスター」略記）を一次資料とした。対象期間は、公正を期すため、ポスターの記録がある1814年から、プティパが引退する1903年までとした。なお、ポスターに欠損がある期間については、当時の新聞の「劇場情報欄」を参照して情報を補った。

【研究方法】

①独立したディヴェルティスマン公演において最も踊られる回数が多かったダンスを明らかにした。
②①のダンスを含む全幕バレエを明らかにし、作品中における物語と①のダンスの接点を調査した。
③全幕バレエの上演数ランキングと①、②で得られた結果を照合し、全幕バレエに対する独立したディヴェルティスマン公演の影響、受容の可能性を実証することを試みる。

【結果】

独立したディヴェルティスマン公演で最も踊られたダンスはマズルカで、次いでロシアのダンス、ハンガリー、コサック、ユダヤ、クラコヴァックであった。バレエ上演数ランキング上位は、『せむしの仔馬』、『ファラオの娘』、『農民の婚宴』であった。バレエマスターの在任期間ごとの集計では、『後宮の反乱』、『ジターナ』、『カタリーナ、あるいは盗賊の娘』、『ファウスト』、『眠れる森の美女』などがランキング上位となった。全幕バレエの中でマズルカは舞踏会の場面に設置される他、有名ダンサーの見せ場として物語の地域性（ポーランド地方）とは無関係に挿入されることが多かった。

【考察】

マズルカは『農民の婚宴』の成功、F.クシェンスキーの活躍を契機に19世紀のサンクトペテルブルクで大変流行したダンスとなり、プティパによる新演出を含む創作過程において、全幕バレエの中のディヴェルティスマンに挿入されるようになった可能性がある。

【付記】

本研究は令和2年度～4年度に科研費(20J14145)の助成を受けたものです。